

杉原たまえ著『家族制農業の推転過程……ケニア・沖縄にみる慣習と経済の間……』

日本経済評論社、1994.2、P257、¥3,296

関西学院大学 鳥越皓之

昨年、モンゴル国を三度ばかり訪問した。それは環境調査であったが、環境問題はつねに開発問題とからんでおり、この二つの問題について現地でなやみ、考えさせられることが多かった。現地での宿題を背負って帰って来た者にとっては、この杉原の本はおもしろい。つまり、この本は机の上で読んで頭で（論理で）納得するよりも、現地から帰って読んでみると考えさせられることの多い本なのである。

この本は新従属理論の延長上にある。すなわち、単線的発達史観に立つのではなく、各国や地域の独自の経済発展のあり方を考えようとしている。つまり、周辺部の経済発展が中心部における資本主義のあり方に規定される側面を認めつつも、各国や地域の歴史的風土が独自の経済発展をもたらす側面を積極的に評価するのである。

ここで留まれば、この本はややたいくつな本になったのであるが、杉原はそこに住む人間に関心をもってしまったために、「人間にとっての豊かさ」とはなにか、と問わざるを得なくなり、ここから杉原の論理的展開の苦しさが出て来るし、現場から考えるわれわれにとってこの杉原の論理的展開の苦心に同調するのである。

杉原は各国や地域がもつ伝統的経済を家族制共同体にとらえ、この家族制共同体が外部からの経済的刺激に対し、どのようにうまく対応しているかを、ケニアと沖縄の事例を使いながら説明する。沖縄の村落を長年研究している村研のメンバーもいるから、ケニアと沖縄の事例でもってこの壮大な論理を説明するの？と訝しがるかも知れないし、それも正当な疑問なのだが、杉原のこの本は、その種の年寄り臭い疑問を、かつての朝潮のような一直線の押し出しの技でもってしのぐ勢いがある。若い著者の将来性を匂わす好著である。